

# 法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-11-10

リチャード・ウェーランほか著／高田ゆみ子  
訳『ロバート・キャパ スペイン内戦』

川成, 洋 / Kawanari, Yo

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大原社会問題研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大原社会問題研究所雑誌 / 大原社会問題研究所雑誌

(巻 / Volume)

502

(開始ページ / Start Page)

69

(終了ページ / End Page)

70

(発行年 / Year)

2000-09-25

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009024>

## 書評と紹介

リチャード・ウェーランほか著  
高田ゆみ子訳

### 『ロバート・キャパ スペイン内戦』

評者：川成 洋

1954年、ロバート・キャパはインドシナ戦線で撮影中、地雷に触れて死亡。享年51歳。彼の非業の死を悼んで、友人のアメリカの作家ジョン・スタインベックはこう述べた。

「キャパは、戦争を写真に撮るのは不可能だと知っていた。なぜなら戦争とは、多分に一種の感情であるからだ。ところが彼は戦争の傍らにいるものにカメラをむけ、その感情をまさに写真にとった。子どもの顔に、すべての人々の恐怖を見せることができたのである」

ところで、「第二次大戦の前哨戦」といわれたスペイン内戦（1936-39年）が、弱冠23歳のユダヤ系ハンガリー人の報道写真家エンドレ・フリードマンを「世界最高の戦争写真家」（英誌『ピクチャー・ポスト』1938年12月）ロバート・キャパへと見事な変身をとげさせたのだった。1936年8月、第一次大戦の最大の激戦地「ベルダンの戦い」20周年記念平和集會を取材後、スペインの戦場に赴く。社会主義運動の活動歴とユダヤ人のために、ブタペスト、ベルリンと2回に及ぶ亡命体験者であるフリードマン青年にとって、相対して戦う両陣営の中で共和国陣営への取材は、当然であった。

最初のコルドバ戦線で、共和国軍兵士が撃た

れた瞬間を捉えた有名な写真「崩れ落ちる兵士」で一躍脚光を浴びる。フランスの『ヴユ』『ルガール』、さらにアメリカの『ライフ』などの雑誌に同時掲載されたからである。

だが、百万に一つの偶然の産物であるこの写真に関して、「ポーズを取らせた」「キャパ以外のカメラマンの作品」という噂がキャパの存命中にすでにささやかれていた。

どういう訳か、バカバカしいと思ったのか、キャパ自身こうした噂にあえて反論しなかった。

この二つの致命的な噂を検証しようとしたイギリスの『タイムズ』紙の記者、フィリップ・ナイトリーの『戦争報道の内幕 隠れた真実』（時事通信社）は、キャパにまつわる人びとと会い、事実を究明しようとしたが、今となっては時間がたち過ぎ、噂の真贋はたしかめられないと述べている。その後間もなく、スペインで被写体となった兵士の身元が確認され、しかもその身内の証言も得られ、いわゆる「ヤラセ」騒動も一件落ち着いたのである。

コルドバ戦線の後に、恋人ゲルダ・タロー（この女性写真家の姓は、当時パリにいた岡本太郎の「太郎」からとった）とともに、スペインの激戦地を追い求めて撮影する。マドリード近郊の、わずか20日間で両軍あわせて実に4万人の戦死者を出したブルネテの戦闘で、7月24日、撮影中のタローが、プレーキの壊れた共和国軍の戦車に押しつぶされ、翌朝死んでしまう（唯一の日本人義勇兵、ジャック白井も、7月11日、反乱軍の銃弾を頸部に受け戦死した。詳しくは、川成洋『スペイン戦争 ジャック白井と国際旅団』朝日選書）。

本書は、キャパの弟、コーネル・キャパによ

ってマドリードのレイナ・ソフィア国立美術館に寄贈されたキャパの写真205点を編纂したものである。

内戦勃発直後の共和国陣営の希望と士気のある市民の様子から、やがて共和国側の敗北が濃くなるバルセロナやその周辺の敗残兵や難民の悲惨な脱出劇を克明にフィルムに刻印している。

1937年5月のゲルニカの爆撃とほぼ同時期のビルバオ空襲に際して、逃げまどう住民を撮影した。そのときの様子を後にキャパは、こう回想している（『生み出される死』）。

「町にはほとんど防御がなかった。爆弾が防空隊に炸裂した。バレンシアでもマドリードでも毎日のように甲いの鐘が鳴らされた。……いつも同じ繰り返しだった。サイレンが鳴り、パニックが襲い、爆弾が大音響をたてた。そして埃が静まると人びとは、帰宅していない父や母の名がリストに載っていないかを探した。死体公示所へ向かうのだった」

また、1939年1月15日、共和国の人びとのスペイン脱出の様子について、こう書いている。

「近隣住民のグループや小家族が歩いてきた。手押し車を押す人びともいた。女たちの多くは、おそらく油かワインのジャグのはいった買い物バックやバスケットを頭の上に乗せた。……彼らは、数日前は貧しい人びとではなかった。通りすぎていく人たちの中にはきっと富裕な暮らしの記憶を持つ人もいるだろう。しかしそのような差異はすぐに消滅してしまう。そこに残っているのは共通の運命なのだ」

本書の中で圧巻なのは、本書の表紙にもなっている「モンブラン、タラゴナ、1938年10月25日」というキャプション付きの、国際旅団の解散式の一コマである。どこの国から来たのか分からないが、握り拳の共和国軍の敬礼をして歌をうたっているようだ。無事帰還できたのだら

うか、それとも亡命か、なんとも不安げな顔付き。内戦での凄惨な戦闘をくぐり抜け、三割強の（大隊によっては、5割近くも）の戦友を失った国際旅団の義勇兵たち。この写真だけで、外国人義勇兵たちの気持ちを十分すぎるほどよく分かる

カメラを向けながら、「何もしないで傍観したり、まわりの不幸を記録するしかないのも、辛いことだ」とキャパ自ら述懐している。

こうした悲しみと怒りの混じった眼でとらえた写真集が本書なのである。

それ故、と言うべきか、生涯、一回も家庭を持たず、あの熱烈な恋愛をしたイングリット・バーグマンでさえも結婚へと踏み切らせなかったし、彼の活躍の最大の拠点地パリでもホテル住まいであった。いつでも、どこでも、戦争の発生する場所へ馳せ参じるためである。スペイン内戦、日中戦争、第二次大戦のヨーロッパ戦線、イスラエル独立戦争、そして仏領インドシナ戦争、など20世紀の重大な戦争を必ず撮り続けてきた。それは「戦争の恐ろしさを告発し、勇敢な行為をたたえ、勝利や平和のよるこびを満喫し、日常生活を襲う運命のきまぐれを見つめるのが彼の生涯をかけた計画だった」（リチャード・ウェーラン『ロバート・キャパ写真集』宝島社）からである。（リチャード・ウェーランほか著／高田ゆみ子訳『ロバート・キャパスペイン内戦』岩波書店、2000年1月刊、201頁、定価6,800円）

（かわなり・よう 法政大学工学部教授）